
【体験版】強化指定寮305号室 ～元ジュニア王者、24時間管理される肉体～

—— STORY ——

サインひとつで、俺の体は誰かのものになった。

日本ジュニアボクシング王者の19歳・蒼。推薦入学した国立体育大の「強化指定選手専用寮」で、契約書3ページ目の細かい字に気づいたのは、奨学金が母の手術費に振り込まれた後だった。

冷徹な数値主義の玲、柔道出身コーチの厳、医務官補佐の柚、栄養管理の悠。専門分業の管理者4人が、蒼の身体を24時間体制で記録していく。

国体優勝の夜、23時30分。蒼の右拳は、なぜ305号室のドアを、ノックしたのか。

※本作は全9話のうち、第1話・第2話を収録した体験版です。

【 目 次 】

第1話 強化指定の契約書

第2話 許可なく萎えるな

1

第1話 強化指定の契約書

サインひとつで、俺の体は誰かのものになった。

そのことに気づいたのは、契約書の3枚目をめくった2日後の夜だった。

だが、気づいた時にはもう遅い。奨学金は口座に振り込まれ、母の手術費に充てられ、妹の学費の半分にも届いていた。

あの日、俺は何を読んだんだろう。いや、読んでいなかった。

9月1日、朝9時45分。

あと15分で入寮手続きが始まる。

俺は国立体育大学の正門をくぐった。残暑の風。街路樹の百日紅が、赤い花を落としている。頬に花びらが1枚張り付いて、俺はそれをジムタオルでぬぐった。

ジムタオル。これが俺の唯一の私物だ。洗濯して色があせている。子供の頃、母がくれた1枚。このタオルで、俺は何百試合のゴングを待ってきたか。

かつての俺なら、見ず知らずの人間に体を差し出すくらいなら殴り倒して逃げただろう。だが今の俺にとっては、母の手術費のほうが一軒家より重かった。その額、400万円。俺の手には届かない数字。大学が出す推薦奨学金は300万円。差額100万円は、プロテストに受ければ契約金で返せる。

計算だった。ただの計算。

これはジャブ程度の話だ。俺は自分に言い聞かせた。強化指定寮に入って、飯を食って、ジムに通って、プロテストを取って出て行く。4年もいるつもりはない。1年で十分だ。

赤い花びらが、タオルにまた1枚落ちた。

俺は右手で拳を握り、親指で人差し指の関節を鳴らした。ぽきっ、と小さな音がした。

「早瀬蒼くんだよ。待ってたよ」

寮の玄関で声をかけてきたのは、明るい茶髪の小柄な男だった。身長は俺より少し低い。丸顔で笑うと目が細くなる。紺のパーカー姿で、白衣は着ていない。

「……ああ」

「柚。3年。医務官補佐やってる。荷物、運ぶね」

柚と名乗った男は、俺のスーツケースを軽々と持ち上げた。細身の腕だが、持ち方が上手かった。

305号室。

エレベーターで4階。廊下の突き当たり。他の部屋と比べて妙に奥まった場所にある。

「ここだけ独立してるんだ。強化指定の特別室」

柚がドアを開けた。

6畳の部屋が、俺を待っていた。ベッド。机。クローゼット。窓からは体育大のグラウンドが見える。ごく普通の学生寮の一室。

ごく普通。

俺はそう思ったかった。

部屋の机に、契約書の束が置かれていた。

厚い。分厚い。B5サイズで20ページはある。

俺は椅子に座って、最初のページを開いた。強化指定選手専用寮・特別契約書。4年間の奨学金、授業料免除、プロテスト推薦。太字で書かれている部分だけ読んだ。

全部、俺が欲しい条件だった。

「ペンはこちら、使って」

柚が黒いボールペンを差し出した。

俺はサインした。1枚目。2枚目。3枚目。署名欄に「早瀬蒼」と書き続けた。ボクシングの試合前にグローブを履く動作と似ている。迷うと負ける。迷わずサインする。

「最後のページまでお願い」

俺は20ページ目までサインした。

柚は契約書の束を胸に抱えて、嬉しそうに笑った。

「ありがとう、蒼くん。次は基礎測定だから、こっち来て」

基礎測定。健康診断。普通の言葉だった。

俺はジムタオルを肩にかけて、柚の後をついていった。

今の俺は知らなかった。

3枚目の真ん中にあった「強化プログラム細則同意書」の文字の大きさが、他の条項の半分しかなかったことを。

そして、俺のサインがその下にもきれいに並んでいたことを。

304号室。

ドアに「健康管理室」のプレートが掛かっていた。

消毒液の匂いが鼻をついた。ボクシングジムで嗅ぎ慣れた匂いと、少しだけ違う。病院の匂い。

中に2人の男がいた。

「早瀬蒼さん、ですね」

最初に声を発したのは、白衣の長身だった。

身長183センチ。銀フレームの細い眼鏡。黒髪を後ろに流している。指が異様に長い。切れ長の一重で、俺を頭から足先までゆっくりと見た。

「玲。4年、スポーツ医学専攻。強化指定寮の主将で、あなたの担当です」

声が低くて冷たい。事務口調。感情がない。

玲は俺の右耳を5秒間、じっと見た。

なぜ耳なのか、俺は知らなかった。

もう1人。

体の厚みが違う。身長188センチ、体重95キロはありそうな、坊主頭の男。無精ひげ。日焼けした褐色の肌。筋肉がTシャツを押し上げている。右眉に1本の傷があった。

「厳。コーチだ。お前のトレーニングも見る」

敬語は使わなかった。

この男、強い。俺は格闘家の目で判断した。全日本重量級の選手だったと一目でわかる体。下半身の重心が低い。突っ込んでも崩せない。

柚がもう1人の存在を紹介した。

「それと、あと1人」

カーテンの奥から、銀髪に近い染めの男が出てきた。身長175センチ、痩せ型。金属フレームの薄い眼鏡。常に微笑んでいるのに、目だけが笑っていない。

「悠です。栄養管理担当です。蒼さんの食事、睡眠、排泄——すべて管理します」

排泄。

俺は一瞬間き間違いかと思った。

「では、始めましょう」

玲がタブレットを取り出した。

「服を脱いでください」

玲の声が、事務口調だった。

俺は上着を脱いだ。Tシャツも脱いだ。ジャージも脱いだ。

「下着もです」

「……なんで」

「基礎データの測定です。体組成、骨格、筋量——全裸でないと正確な数値が取れません」

俺は黙った。

プロテストの推薦書は、この男の署名が要る。それは契約書に書いてあった。4枚目に。

俺は下着を脱いだ。

全裸になった俺を4人の男が見ていた。

玲は観察の目だった。蔽は品定め目だった。柚はにこにこ笑っていた。悠はタブレットに何か入力していた。

身長測定。

「172.3センチ」

体重。

「63.4キロ」

体脂肪率。ここでキャリパーが出てきた。

キャリパーは、脂肪を挟む医療器具だ。箸に似た形。白いプラスチック。

「乳首の横、上腕、腹部、太ももの前、太ももの後ろ、ふくらはぎ。6箇所測ります」

玲は俺の乳首の横の皮膚を2本の指でつまんだ。そこにキャリパーを当てる。かちっ、と音がした。

「乳首横、9ミリ」

悠がタブレットに入力した。

俺は奥歯をかんだ。乳首そのものは触られていない。横を挟まれただけだ。だが、玲の長い指が乳首から1センチの場所にある。皮膚の温度が違う。俺の乳首が、勝手に硬くなっていく。

「反応良好ですね」

玲が数値を読み上げながら、乳首の硬さをちらりと見た。

俺は顔をそらした。

他の部位の測定が続いた。皮下脂肪、筋量、水分量。全部、数値化された。

悠がタブレットの画面を見せた。

「蒼さんの体脂肪率8.2パーセント。筋量49キロ。アスリートとしては優秀です」

俺はこの言葉を、こんな状況で言われたのは初めてだった。

そして、ここからが本題だった。

「次は、対称性の確認です」

玲が言った。

「？」

「アスリートは左右対称性が生命線です。筋量も骨格も、内臓も、そして――生殖器も」

玲は俺の前にひざをついた。

「両ひざを開いてください」

俺はパイプ椅子に座っていた。全裸のまま。ひざを開けと言われた。

「……なんのために」

「睾丸の左右差を記録します。成長期の個体差は2グラム以内が基準です」

俺は息を吸った。吐いた。

拳を握った。親指で人差し指の関節を鳴らした。ぽきっ、と音がした。

玲が俺の手を見ていた。

「記録票に、ストレス反応も加えましょう」

俺はひざを開いた。

自分から開いた。

母のため、と自分に言い聞かせた。

玲の長い指が、俺の陰嚢を持ち上げた。右側を、まず。手のひらに乗せる。冷たい。

「右、18グラム」

悠がタブレットに入力した。

続いて左側。

「左、20グラム」

玲の指が、ゆっくりと陰嚢をもむように動いた。

「左が2グラム重い。成長期の個体差の範囲内です。記録します」

俺のペニスが、勝手に反応し始めていた。

自分で殴りたかった。何やってんだ、俺の体。

ジムでサンドバッグを100回たたいても反応しなかった。

見ず知らずの男に陰嚢を測られただけで硬くなる。

「勃起反応も早いですね。記録します」

「……ちっ」

俺は舌打ちした。

玲は表情を変えずに次の工程に進んだ。

「ペニスサイズ。勃起時を測ります」

メジャーが出てきた。布製の、仕立て屋が使うような柔らかいやつ。

玲が俺のペニスに指を添えた。根元から亀頭の先までメジャーを這わせる。

「現状、半勃起で11センチ。完全勃起を記録したいので、少し協力してください」

協力。

俺は何も言わなかった。

柚が横から手を伸ばした。柚の手は温かかった。

「痛くしないから。蒼くん、力抜いて」

柚の指が、俺のペニスの裏筋をゆっくりなでた。

上から下へ。下から上へ。

「んっ」

勝手に声が漏れた。

俺は奥歯をかんだ。

「亀頭の充血、良好です。包皮の可動域、正常」

玲が俺の亀頭を親指でつまんだ。くるり、と包皮を剥く。先走りの透明な液が一滴、にじんだ。

「先走り液、分泌確認。粘度正常、色透明」

悠がタブレットに入力した。

巖が横でその様子を見ていた。腕組みをしていた。下唇を親指でなでていた。巖の呼吸が、平時より速い。俺はそれに気づいた。この男も俺を見て興奮している。

「完全勃起まで、もう少しです」

柚が両手で俺のペニスを扱き始めた。

しゅ、しゅ。しゅ、しゅ。リズムが規則的だった。素人じゃない。何人のペニスを扱いてきたんだ、この男。

「あっ……」

「もう少し」

俺のペニスが、完全に勃起上がった。反り返って、腹に当たるくらいに。

「完全勃起時、14.8センチ。太さ、4.2センチ。亀頭径、5.1センチ」

玲が数値を読み上げた。

悠が入力した。

俺のペニスは、先走り液を滴らせ続けていた。

柚が手を止めた。

「このまま射精してもらいます」

玲が言った。

「は？」

「初回サンプリングです。精液の量、色、粘度、ph値を記録します」

玲が陶器のマグカップを取り出した。

白い、底が厚い、普通のマグカップ。ただし、底にセンサーが仕込まれているらしい。コードがタブレットにつながっている。

「これに射精してください」

「……自分で、やるのか」

「はい。我々は記録するだけです」

俺は椅子に座ったまま、自分のペニスに手を伸ばした。

4人の男が、俺の手元を見ていた。

全裸の俺が陶器のマグカップを左手で持ち、右手で自分のペニスを扱う。これが、俺の大学1年目の最初の仕事だった。

「恥ずかしがらずに、どうぞ」

柚がにこにこ笑っていた。

俺は目を閉じた。

視線を遮断すれば、こいつらがいないことにできる。いないふりをすれば、これは1人でシャワーを浴びた後の普通の処理だ。

俺は右手を動かした。しゅ、しゅ。

だが、目を閉じても消えなかった。玲の指の感触。柚の手の温度。メジャーの布。キャリパーの冷たさ。蔽の呼吸。悠のタブレットの音。

全部、俺の体の記憶に焼き付いていた。

2分と30秒。

それが、俺が自分の射精までに要した時間だった。

「出ます」

俺は小さく言った。

マグカップを亀頭の下に寄せた。

びゅるっ、びゅるっ、と2度、3度。熱い液体が、マグカップの底にぶつかった。重い音がした。

俺は目を開けた。

マグカップをのぞき込む玲の顔が、目の前にあった。

玲が両手でマグカップを包むように持った。

「温度、37.2度」

タブレットを見た。

「深部体温より、0.5度高い。あたたかいな」

玲の口から出た言葉が、事務口調のまま「あたたかい」だった。

その瞬間、俺の体の芯が冷えた。

この男にとって、俺の射精した精液は、温度を測るための液体でしかない。だが、「あたたかい」と言った。感情じゃない、と言いたげに、事務口調の中に混ぜてきた。

俺は歯を食いしばった。

くそったれ。

「量、12.3ミリリットル。色、わずかに白濁。粘度、普通より少し高い。ph、7.4」

悠が読み上げた。

「優秀なデータです」

玲がうなずいた。

そして、タブレットに指を走らせた。

「記録票に反映しておきます」

その一言で俺の初日は終わった。

服を着ても、俺の体の熱は収まらなかった。

ジャージのズボンの中で半勃ちが続いていた。布地が亀頭に当たるたびにびくっと跳ねる。

「明日の朝7時、朝食です」

悠が笑顔で言った。

「筋量増加メニューを組みました。タンパク質摂取量、1日210グラム。射精によるカロリー消費も計算済みです」

射精によるカロリー消費。

俺は悠の顔を見た。悠は微笑んでいた。目は笑っていなかった。

「いいか、蒼」

厳が言った。

「お前、プロテスト受けるんだろ」

「……ああ」

「それなら、俺たちの言うとおりにしろ。1年で結果出させてやる」

厳の言葉は、嘘じゃなかった。この男たちは、俺のプロテスト合格のために動いている。同時に俺の体を記録している。両立しているのだ、奴らの中で。

プロテスト合格と、体の提供は。

玲が契約書を取り出した。20ページの、さっき俺がサインした束。

「確認のため、3枚目をもう1度お見せします」

開かれた3枚目には、細かい文字が並んでいた。今になって俺は読んだ。

『強化プログラム細則同意書

第1条 本契約対象者は、24時間体制の身体データ収集に同意する。

第2条 寮内での身体接触、及び精液採取を拒まない。

第3条 射精頻度・量・時刻を自己申告する。

第4条 細則違反時は推薦資格を取り消す。

第5条 記録票の最終署名権は、対象者本人に帰属する』

俺はサインしていた。

20ページ全部に俺の名前があった。

「……ちくしょう」

「違約金の発生は、奨学金の全額返金です。300万円＋利息」

玲が淡々と言った。

「母の手術費、もう振り込まれたんだろ」

玲はうなずいた。

「昨夜、お母様の口座に」

俺は床を見た。

床のタイルの模様が、試合のリングの色に見えた。

白と黒。

俺は右手で拳を握って、親指で人差し指の関節を鳴らした。ぽきっ、と乾いた音がした。

「記録しておきます」

玲が言った。

「何を」

「ストレス時の身体的癖。拳を鳴らす、親指で関節を鳴らす——これが蒼さんの指標です」

悠がタブレットに入力した。

俺のすべてが、数値に変換されていく。

その夜、母から電話が来た。

『蒼。おかげで手術の日程が決まったよ。来月の水曜日』

母の声は、少し若返っていた。

俺は良かったな、とだけ言った。

『あんた、寮の生活どうなの。食事とか、ちゃんと出るの』

「出てる。栄養士が管理してくれてる」

『へえ。いい寮ね』

「いい寮だよ」

いい寮だった。

本当にいい寮だった。

電話を切って、俺は天井を見上げた。

机の上のタブレットが、ぴこん、と音を立てた。悠からメッセージが来ていた。

『本日の記録票、サインをお願いします。明日朝7時までに』

添付されたPDFを開いた。

『早瀬蒼 初日基礎データ

身長172.3／体重63.4／体脂肪8.2／筋量49.0

睾丸対称性（右18g・左20g）

勃起時ペニスサイズ14.8cm

初回射精時刻14時37分／量12.3ml

分泌液粘度・ph・温度（37.2度）

ストレス指標（拳握り・関節音）』

全部、俺の体のデータだった。

署名欄があった。

『記録者サイン 玲 / 承認サイン 』

承認サインの欄が、俺を待っていた。

俺はタブレットに指を走らせた。

震える指で。

だが、止まらない指で。

サインした。

送信ボタンを押した。

ぴこん、と音がした。

玲から返信が来た。

『記録、完了しました。おやすみなさい』

俺はベッドに倒れ込んだ。

ジャージのズボンの中でまだ半勃起が続いていた。

枕に顔を押し付けた。

母の病室では今頃、消灯の時間が過ぎているだろう。看護師が巡回に来て、母の枕元のスタンドを消すだろう。

だが、その静けさは、この305号室には届かない。

俺の部屋では、タブレットが机の上で、もう1度びこん、と鳴った。

明日の朝7時の朝食メニューが、更新されたのだった。

(第1話 了)

2

第2話 許可なく萎えるな

「おはようございます、蒼さん」

「……」

「昨夜のぶん、15キロカロリー追加でご用意しました」

昨夜、俺は記録票に23時47分と書いた。

寝る前の自慰だった。2度目の射精。6.2ミリリットル。朝のぶんと合わせて、1日で18.5ミリリットル。色、白濁。粘度、前日よりやや高い。悠からのメッセージはぴこん、と鳴って、俺は震える指で承認サインを送った。

朝7時。

ドアの前に悠が立っていた。漆塗りの黒いトレイを片手に持って、体を斜めにして、寮の廊下の照明に金属フレームの眼鏡を反射させていた。銀髪に近い染め。常に微笑んでいるのに、目だけが笑っていない。

俺はドアを開けたまま、一步下がった。

「食欲ないか」と俺は言った。

「あります、と嘘をついてください。朝食を拒否すると記録票の項目が増えます」

悠は返事を待たずに机の上にトレイを置いた。

鮭の塩焼き。卵白のオムレツ。玄米。小松菜のお浸し。鶏むね肉のグリル。プロテインシェイカー。水、500ミリリットル。

「本日のタンパク質、215グラム。そのうち15キロカロリーは、昨夜の射精分の補填です」

「……それ、毎日言うのか」

「言います。蒼さんが自分の消費と摂取を把握するのも、記録の一部ですので」

俺はジャージのポケットにタオルを突っ込んだ。ジムタオル。母がくれた1枚。今朝もこれで顔をふいた。

悠が机のタブレットを立ち上げた。

「8時からトレーニング。9時、厳コーチと組み手。10時半、シャワー。11時に玲主将の管理室で、本日の体組成測定です」

「きのう測っただろ」

「きのうは初日の基礎データ。今日からは、日々の推移を取ります。数値は、毎日変わるので」

悠はそれだけ言って、部屋を出ていった。

俺は卵白のオムレツを箸で割った。湯気が立った。

いい匂いだった。

それが、なおさら気に入らなかった。

グラウンドの隣、体育大附属の格闘場。

リングは一面だけ。リングの4隅には、誰が掛けたのか、朱色のコーナーパッドがついている。ジュニアの決勝会場と同じ色だった。

巖が黒いTシャツ姿でグローブを取っていた。16オンス。スパーリング用。

「蒼。温まったか」

「温めた」

「跳べ」

俺はリングに上がってその場で飛んだ。つま先だけで、20回。シューズのソールがキャンバスに擦れる、きゅ、きゅ、という音。

巖も上がってきた。188センチ。俺の頭のとっぺんが、巖のあごより下にある。

「3ラウンドだ。3分、インターバル1分。当てていい」

「本気でやっていいのか」

「お前、甘いな」

ゴングが鳴った。

俺は左から回ってジャブを2発。巖のグローブに当たる。巖は動かない。俺は速度を上げて、右ストレートを肋骨の下に入れた。巖の脇腹が一瞬だけ沈んだ。

「いい右だ」

巖がつぶやいた。

だが、巖の返しが速かった。俺は左フックを顔面に当てる算段で踏み込んだ。それを待っていたように、巖の右ストレートが俺のこめかみをかすめていった。風圧で髪が揺れた。次の瞬間、俺のひざ裏に、巖の足がすくい上げるように入った。

ぐっ、と視界が落ちた。

キャンバスに背中がついた。

「言ったろ。下半身が浅い」

巖が俺を見下ろしていた。

俺は右腕をついて、すぐに起き上がった。グローブで額をぬぐって、ふっ、と鼻で息を吐いた。

「立て。まだ1ラウンド目だ」

コーナーに戻って水を飲んだ。柚が水のボトルを差し出してくれた。いつのまにか、リングサイドに来ていた。丸い顔でにこにこ笑って、俺のあごににじんだ汗をタオルでぬぐった。

「蒼くん、あごに力入りすぎ。もう少し抜いて」

柚の指が俺のあごに触れた。指が温かい。

ゴングが鳴った。

2ラウンド目。俺は左を強く出した。巖がスリップするふりで俺の間合いに入ってきた。俺のガードが一瞬下がった。巖の右が、俺の右耳の横をかすめた。風が耳の中に吹き込んだ。

「ひっ」

俺の口から、出るはずのない音が出た。

試合では出ない音。サンドバッグでも出ない音。

俺は足を止めた。

巖の右が、俺の左頬に入った。軽く。ダメージはない。それでも俺は立っていられなかった。両ひざがキャンバスに落ちた。

巖は動きを止めていた。

俺を見下ろして、にやり、と笑った。

「蒼」

「……」

「試合でこの音を出したら、お前は負けてた」

俺は拳でキャンバスをたたいた。1回、2回。

「その耳だな、お前の弱点」

巖が言った。

リングサイドで柚がタブレットに指を走らせていた。

俺の弱点が、記録票に追加された。

シャワー室で俺は頭から水を浴びた。

冷水にした。燃える右耳を冷ましたかった。だが、冷たい水が耳に当たるたびに股間が熱くなった。自分の体が、自分のものじゃないみたいだった。

タイルに拳を押し付けた。関節がぽきっ、と鳴った。

シャワー室の外から悠の声が聞こえた。

「蒼さん。11時、管理室です。まっすぐ来てください」

俺は水を止めた。

タオルで体をふいた。ジムタオルではなく、寮が支給した白いバスタオル。これは借り物だ。俺の体も借り物になりかけている。

ジャージの上下を着て、そのまま304号室のドアをたたいた。

「どうぞ」

玲の声がした。

いつもと同じ、事務口調。

304号室。

入ると、4人の男が、きのうと同じ配置で立っていた。

玲はカーテンのそば。蔽は窓際。柚は処置台の横で、にこにこ。悠はタブレットを持って、奥のデスク。

「昨夜の記録は確認しました。2度目の射精時刻、23時47分。量、6.2ミリリットル」

玲がタブレットを俺に見せた。

「初日としては安定した数値です」

「……」

「服を脱いでください」

きのうと同じ言葉だった。

俺はジャージを脱いだ。Tシャツも脱いだ。下着も迷わずに脱いだ。きのう1度脱いだ体は、もう1度脱ぐのが早い。殴られ続けた場所が、次の打撃に慣れるのと同じだった。

全裸になった俺を玲が見た。

「発汗、まだ残っていますね。冷水で冷やしたのは正解です」

玲は俺の右耳を見た。

「この耳で、きのうから1日で、いくつデータが取れると思いますか」

俺は黙っていた。

「キャリパーを」

柚が白い器具を玲に渡した。きのう、俺の乳首の横を挟んだあの器具。

玲が俺の前に立った。指が長い。白い。爪が綺麗に切られている。

「きのうと同じ部位を挟みます。推移を取るために」

玲の指が、俺の左の乳首の横をつまんだ。そこにキャリパーを当てる。かちっ。

「乳首横、9ミリ。変化なし」

きのうと同じ。

違うのは、俺の乳首の反応だった。

キャリパーが離れた瞬間、玲の人差し指が俺の乳首に触れた。測定の名目はない。ただ、触れただけ。

「硬度、きのうより上がっています」

「触ってんじゃねえよ」

「測定です」

玲は指の腹で俺の乳首をつまんだ。左右。それから親指の爪で先端を押した。

俺の背中が反った。声が出そうになった。奥歯で止めた。

「痛いですか」

「痛くねえ」

「そうですね。痛覚より、性的興奮の反応です。悠さん、記録」

悠が入力した。

俺のペニスは、もう勃起し始めていた。

そのことに俺自身が一番怒っていた。

次はペニスサイズの計測だった。

布製のメジャーが出てきた。柔らかくて白い、きのうと同じやつ。

「現状、半勃ち。完全勃起まで持ってってください」

「また、自分でやれって言うのか」

「ご自分でも構いません。補助が要るなら、柚さんに」

俺は目を閉じた。

自分の右手で自分のペニスを握った。

しゅ、しゅ。

きのうの2分30秒より、速い。俺の体が学習している。自分の意思と逆の方向に。

ペニスが完全に立ち上がった。

玲がメジャーを添えた。

「14.7センチ。きのうより0.1センチ少ない」

玲の声は、事務口調だった。きのうと同じ。だが0.1センチ、と言うときに、玲の口角がほんの短い時間、動いた。動いたと俺は見た。

「少ない？」

「はい。昨夜、射精2回。今朝は食事前。体液の再生が間に合っていない可能性があります」

「……」

「萎えそうですね」

俺のペニスは、メジャーが離れた瞬間、角度を落とし始めていた。4人に見られている、この緊張。きのうは興奮に変わった。今朝は、違った。理由はわからない。萎えていく。

「萎えさせないでください」

「無理言うな」

「無理ではありません」

玲が厳を見た。

厳が壁際の棚から何かを取った。黒いゴム。ベロクロのバンド。医療用血圧計のカフだった。

厳が俺の前に来た。

「脚、開け」

「何だそれ」

「血圧計だ」

厳がカフを俺の陰茎の根元に巻いた。きゅ、と締まる。

「どこに巻いてる」

「根元だ。お前が萎えないようにする」

「は？」

厳がポンプを握った。

しゅぽ、しゅぽ、と空気がカフに送り込まれた。俺のペニスの根元が、じわじわ締まる。

「……う、ぐ」

俺の声が、自分のものとは思えない声だった。

根元が締まると、血が先端から抜けられない。俺のペニスは、抜けなくなった血で強制的に膨張した。きのうの完全勃起より、もっと硬い。角度が、腹に当たる。亀頭の皮膚が限界まで張って、ぴりっ、と痛い。

「14.9センチ」

玲がメジャーを添え直した。

「カフ使用時、完全勃起を保持。0.2センチ増」

悠がタブレットに入力した。

厳が俺の耳元に顔を寄せた。唇が、近かった。

「蒼。俺の許可なく萎えるな」

「……っ」

「筋肉と一緒にだ。使えば、ついてくる」

厳の息が、俺の右耳にかかった。

さっきのリングと同じ。俺はまた、あの音を口から漏らしそうになった。ひっ、という、試合では出ない音。奥歯をかんで止めた。歯が鳴った。

「耳、弱いな」

厳が笑った。

カフがさらに締まった。しゅぽ、しゅぽ。

「これで記録もサイズも取れる。楽だろ」

楽じゃない。

血管が脈打って、亀頭の皮膚が内側からめいっぱい張っている。痛いのは違う。もっと原始的な、内側からの圧力。先走り液が止まらない。糸を引いて、俺のペニスの先から床に垂れた。ぴた、ぴた、と床に小さな水たまりができていく。

「壁、背中つけろ」

巖が言った。

俺は言われた通り、壁に背中を預けた。その体勢で、勃起したペニスが真上に反り返る。重力に逆らって、自分の腹に亀頭の先が当たる。先走り液が俺の腹筋の溝を伝って、へその手前で止まった。

「よく反ってる」

巖が言った。感心したような声だった。

俺は目を閉じた。

閉じたところで、視界が消えるだけで、体の感覚は消えない。カフの締め付け。亀頭の張り。腹に流れる先走り液の生温かさ。全部、まっすぐ体の内側に届いた。

「柚さん」

玲が呼んだ。

柚が俺の前に来た。両手に薬用オイル。てのひらに黄色い液体を落として温めている。

「サイズ記録できないと、玲先輩が困るから」

柚の丸い目が、俺を見上げた。

「蒼くん、力抜いてね」

柚の両手が、俺のペニスを包んだ。

温かい。オイルで滑る。手のひらが、ぴったりと肉茎に吸い付く感触。柚は両手を使った。片手で根元をさすり、もう片手で裏筋を上下する。速度が変わる。予測できない。

しゅ、しゅ、しゅ、しゅ。

しゅ、ぐ、しゅ、ぐ。

柚の手は、きのうより上手だった。きのうは型どおり、リズムが一定だった。今朝は違う。緩急がある。速く扱いて、ぎゅっと握って止める。先端の溝に親指を当ててくりくりと回す。袋を下からすくい上げる。そのまま裏筋を一気に滑り上げる。両手でねじるように肉茎を回転させる。爪の先で、亀頭の裏側の細い筋を、ゆっくりとなで上げる。

「蒼くん、ここ、好き？」

柚の指が、俺の会陰に触れた。

「ひっ」

また、さっきと同じ音が出た。試合では出ない、俺の体の内側から漏れる音。柚は笑って、会陰を人差し指の腹でゆっくり押した。ぐ、ぐ、と中の何かを押すように。

「ここ、前立腺の外側。ここを押すと、先走りが増えるんだよ」

柚の指圧に合わせて、俺の尿道口から先走り液が押し出された。どぷ、と音を立てて、肉茎を伝って落ちた。

その間、厳が俺の耳元から離れない。

厳の指が、俺の右耳の後ろに這った。リングでかすった、あの場所。痛みはもうない。だが、厳の指先が触れると、俺の股間が同期して脈打った。

「お前、ここに当てられると、なんで反応する」

「……っ」

「別にいい。俺が使う分には、悪くない情報だ」

厳の指が、俺の耳たぶをつまみ、離し、つまみ、離しを繰り返した。その度に、俺の肉茎の先から、先走り液が一筋、増えた。

「耳と股間、神経つながってるんじゃないか」

厳が笑った。

「あ、ぐっ……」

「蒼くん、声出していいよ。ここ、ぼくたちしかいないから」

柚が笑った。

温かくて、無邪気で残酷な笑い方だった。

俺は歯の隙間から息を吐いた。止められない。柚の手の動きに合わせて腰が揺れていた。勝手に。

カフが締まっているから、射精ができない。射精したい。だが、根元が締まって出せない。精液が内側で暴れて、出口を探している。

「柚さん。先端だけ」

玲が言った。

柚の親指が、俺の尿道口のすぐ内側をぐりぐりと押した。

「ああっ」

俺の声が、部屋に響いた。

先走り液が、糸を引いて落ちた。

「粘度、高い。きのうより濃い。欲求、溜まっています」

悠が入力しながら言った。

「蒼さん。これは栄養学的には、非常に良い数値です」

「何がだ」

「我慢できている、ということです」

悠の顔が、俺の首筋に近づいた。笑っている。目だけは笑っていない。俺はこの男のその表情を覚えてしまった。

「厳コーチ、そろそろ」

厳がポンプを逆に握った。プシュ、と音がしてカフが緩んだ。血が一気に流れた。

俺の視界が、揺れた。

「射精していいぞ」

厳が言った。

柚が白い陶器のマグカップを、亀頭の下に差し出した。きのうの、あのマグカップだった。

「蒼くん、出して」

俺は奥歯をかんで腰を突き出した。

びゅるっ。

びゅるるっ。

びゅるっ。びゅるっ。

4度、熱い液体がマグカップの底をたたいた。音が、きのうより重かった。白い粘塊が、陶器の底で渦を巻いている。3度目の放出で一筋が柚の指に当たった。柚は口に運ばず、ティッシュでぬぐって、記録用のビーカーに垂らした。

俺はまだ射精が止まらなかった。根元を絞られていたぶん、溜まっていた分量が多い。4度目、5度目。最後の一滴が、亀頭の先から尿道を這うようにこぼれた。

俺の太ももが、がくがくと痙攣した。自分の意思では、止められなかった。

「過剰射精反応。カフ解放時の反動で吐出量が多い」

悠が淡々と記録した。

「気泡少量。ph、通常。色、濃い白濁。良好なサンプルです」

俺はひざから崩れそうになった。壁に手をついた。ジャージは横の椅子に畳まれていた。俺は全裸のまま、壁にもたれた。

玲がマグカップを両手で包んだ。

「温度、37.1度。きのうより0.1度低い」

「……」

「量、14.2ミリリットル。きのうより1.9ミリリットル多い」

悠が読み上げた。

「色、濃い白濁。粘度、高い。ph、7.3」

玲がタブレットに指を走らせた。

「記録完了です」

玲はマグカップを処置台に置いた。中の白い液体が、陶器の底で、ゆっくりと形を崩していく。

玲は俺を見た。事務口調で、淡々と。

「調子、いいですね」

俺はその言葉を顔を背けて聞いた。

調子がいい、というのは、アスリートとしての話だ。俺の射精の話でもある。どっちにも受け取れる。どっちに受け取っても俺は負ける。

玲の指が俺の右耳にほんの短い時間、触れた。ぬぐうような動作だった。汗か、先走りか、どちらかが耳たぶに付いていたらしい。

「耳、乾かしておいてください。感染予防です」

玲の指が離れた。

俺はその感触を、もう少しで思い出しそうになって首を振った。

「悠さん」

「はい」

「承認サインを」

悠がタブレットを俺の顔の前に出した。

きのうと同じ、サイン欄。

俺の指が、一瞬だけ止まった。

だが、止まったのは一瞬だった。指先をタブレットのガラスに置いて、俺は自分の名前を書いた。早瀬蒼。震えない指で。

「今日の数値は記録票に」

悠がぴこん、と送信の音を鳴らした。

「サイン、お願いします」

俺はもうサインした後だった。

悠の言葉が、事後の念押しだった。

俺はタオルで股間をふいた。ジムタオルではない。寮のタオル。今朝は顔をふくのにしか使わなかった、ジムタオルは、もう机の引き出しに戻している。

「お疲れ様でした」

玲が淡々と言った。

俺は服を手にとって、何も言わず、304号室を出た。

廊下の突き当たり、305号室のドアの前で俺は立ち止まった。

窓の外、グラウンドの向こう側。ジムの方角。

ジムでは今頃、他の強化指定選手が、サンドバッグをたたいているだろう。1発ずつ、重い音を立てて、リングに上がる準備をしているだろう。

だが、その音は、この管理室には届かない。

俺はドアを開けた。

机の上で、タブレットが、ぴこん、と鳴った。

今日の記録票が、確定した合図だった。

(第2話 了)